

京都天文學會生る

去る九月十七日の初集會

去る九月十七日の名月の夕、花山天文台では、京都帝國大學天文關係の人々約 28 名が集まつて、かねての計畫に據り、月見を兼ねた懇親會を催したが、其の機會に、新しく「京都天文學會」なるものが組織された、

當日午後八時より天文臺の圖書室で一同集り、山本教授が座長となつて、まづ京都天文學會の組織に關する提議をし、假刷の會規約を説明し、二三の質問なきの後、満場一致を以つて此の提議は可決。即座に會は成立するこゝこなつた。會則は下の通りである。

京都天文學會規約

- a. 本會ヲ京都天文學會 (Kyoto Astronomical Society) ト稱シ、事務所ヲ京都帝國大學天文部内ニ置ク。
- b. 本會ハ天文學ノ研究ヲ目的トシ、定時或ハ臨時ニ研究討議會、談話會、講演會ヲ催シ、又、觀測、見學、調査、出版等ヲスル。
- c. 本會ハ京都帝國大學天文部關係者及ビ其ノ推薦者ヲ以テ會員トスル。
- d. 本會ニ常務委員若干名ヲ置キ、其ノ中ヨリ互撰ニヨツテ常務委員長ヲ定メル。常務委員ノ任期ハ一ケ年トスル。
必要ニ應ジ、本會ニ各種ノ臨時委員ヲ置クコトガアル。
- e. 本會ノ費用ハ總テ會員其ノ他ノ寄附金ニヨル。

即ち、會員には制限があり、目的は天文學の研究を目的とするものであつて、通俗的一般民衆的のものではない。

此の日、會の成立と同時に、最初の例會が開かれ、先づ山本教授、次いで竹田百濟兩教授の演説や講話があつた。其の要領は

山本一清教授： 去る三月二十四日六人の一行が南洋スマトラへ日蝕觀測に出かけ、多少の悪天氣に悩まされながら、こにかく或る効果を収めた。(詳細は略す) それから英子と共に特別汽船でジャヴに渡り、五月十六日から二十五日まで、バタビヤ及びバンドン兩市で開かれた太平洋學術會議に日本の代員として列席。二十四日には天文學部會が開かれ、一二の論

文を讀んだ。又、バンドン市郊外のボシヤ天文臺にも一二度出かけて、60ミリの大望遠鏡其の他を見。ファウト臺長やクライケン、ワレンキスト兩氏にも度々面接した。

竹田新一郎助教授： 去る九月二日から一週間、東京へ出張し、啓明會主催のハイゼンベルヒ Heisenberg 教授及びヂラク Dirac 博士の新物理学に関する連続講演を聴講した。講演は可なり難解で、始め200名ほどもあつた出席者が漸次100名ぐらゐまで減じた有様であつたが、遠來の人々は比較的多く終りまで聴いた。(笑)

百濟教猷助教授： 今日自分が年來やつてゐる periodic orbit 週期軌道の話をする豫定であつたが、一寸忘れて來たものもあるので、俄かに題を變へ、今夕の月見に因んで、月面の反射能のこゝを話さう。月面から日光が反射する明るさについては以前から多くの研究や観測が行はれてゐるが、オイラー Euler、ラムベール Lambert、ロムメル・ゼーリガ Lommel、Seeliger 等の理論が皆實際の月の明るさこゝ合はない。近頃ロシアのマルコフ Markov、バラバシエフ Barabashev 兩氏が月面の一局部づつの極めて精密な光度観測をやつて、各部の凸凹の模様なごを研究したが之れは甚だ有益な研究であると思ふ。自分も可なり以前から此の問題を研究してゐるが、観測と一致するやうな反射理論を作り出すこゝは甚だ困難である。自分の考へこゝしては、此の種の問題のためには成るべく實驗的に觀察を遂行して、其の結果に一致するやうな理論を作り出すやうに心掛けるべきである。誰か暇のある人があれば、一つの白球を作り、之れに種々な方向から光りを投射して、此の白球から反射される光りの強弱を測定されては如何。さうも光は、入射角が 90° に近づけば一般に非常に反射力が強くなるものである。

中村要氏： 鏡を磨くこゝき、面の粗であるか否かは、斜めに光を當てて、其れが如何に反射するかを見るこゝいふ方法が一般に行はれてゐる云々。

談話は興が盡きなかつたが、九時半頃漸く一先づ閉會、四五名は花山の宿舎に泊り、他は下山した。